

# 生きてはたらく表現の指導を目指して

— 教師の課題は何か —

足利市立東小学校 峯 岸 ゆきえ

## 1. はじめに

新しい学習指導要領では、国語科の目標に、言語の指導を通して「思考力や想像力」などの認識力を養うことが明示された。「国語を正確に理解し、適切に表現する能力」は、本来「思考力や想像力及び言語感覚」を内包しているものであろう。それが、はっきりと取り出され、言語による思考力、想像力の働きとして掲げられたということになる。

また、内容的には、表現力と理解力を偏りなく養うこととされ、作文指導のための時間が低学年105時間、高学年70時間と提示された。従来、作文の指導は重視されてきたが、時間数まで示されたのは、それがいかに不振であったかということの現れであるという見方もあると聞く。

しかし、70時間をどのように生み出すかということに関心が向いてしまうと、肝心な点から問題はそれてしまうと考えられる。これは単に時間数の問題ではない。音声言語の指導も含めて、表現の指導に質的な転換が求められているのである。

では、私たちの毎日の国語教室に求められている表現の学習とはどんなものなのであろうか。この記録は、自らの指導法を振り返り問題点を洗い出す中で新しい方向を見出すことを願って実践してきた1事例である。

## 2. 基本的な考え方

### (1) 作文指導の問題点を探る

従来の作文指導が実のあるものになりにくかったことの原因には多くの問題点と今後の課題が含まれていると考えられる。それを児童の側と指導者の側の両面から考えていきたい。

#### ア 児童の側の問題点

作文について一般的に指摘されることは数多くあるが、大きくまとめると次のように絞られる。

- ・基礎的な表現力がついていない。
- ・取材の目が育っていない。(何を書いてよいのかわからない。)
- ・高学年になるほど作文嫌いの子どもが増えてくる。
- ・非常に個人差が大きい。

4月以来担任している児童(6年生)についても同様のことがいえる。特に、表現力に関しては、経験したことを順序立てて書くというようなことはできるが、表現を工夫して論理的な文章を書くというようなことになると、つまづいてしまう児童も少なくなかった。また、関心・意欲の面でも個人差が大きく、一口に個人差といっても、作文の技能面から意欲まで多岐に渡っていることを知らされる。

日常の言語生活ではよくおしゃべりはするが、相手を意識し、聞いては話し、話しては聞くという態度が身についている児童はまだ少ない。したがって、話し合い活動でも、いわゆる、形式的な話し合いの仕方は知っていても、内容的に深まったものになりにくい。

これは、相手を意識し相手にどう伝わるかということを考えながら表現する態度が育っていないためと考えられる。作文であっても対話や話し合いであっても、相手意識ということでは全く共通することである。

#### イ 教師の側の問題点

児童の課題はおおむね教師自身の課題であるという観点から考えてみたい。

これも指摘されていることは多いが、第一に作文指導が敬遠されている傾向があるということがある。その原因として考えられることは、まず評価の問題、次に教材のもっている魅力というか説得力であろう。

第二に、取材・構想・記述・推敲とパターン化された指導方法に固定化され、児童にとって魅力を失っていることが挙げられる。

第三に、教科書教材への依存ということがある。教科書はよく研究された出版物である。が、これに全面的に依存しているばかりか、縛られているような授業展開では魅力あるものにならないであろう。

次に評価の問題とも関連して、結果としての作品だけを重視しすぎていなかったかということがある。何をどう書けばよいのかわからない児童にとっては、書くプロセスでの指導こそ大切であろう。

以上、いくつかの問題点を考察すると、ひとつの共通する事柄に行き当たる。それは、児童の実態をどのように指導内容に織り込んでいくかということである。自分の思いをぜひ伝えたい表現したいというところから学習はスタートするべきものである。が、それは二の次になって、指導事項ばかりが優先されていなかっただろうか。児童の実態と教科書教材をどのように有機的に関連させていくか、大きな課題である。

また、作文指導の風潮としてある「優れた表現が素晴らしい」という見方だけでは行き詰まるということを自覚しなければならない時機にきていると考えられる。これは、前述した作品中心の評価ともかかわることである。従来の生活体験を中心とした作文指導では、どうしても表現・記述のしかたに目がいきやすい。これまでの作文指導に「……の文章の書き方」というような形式的な傾向があったのも、同様な理由からであろう。「優れた表現」を追求していくと、他の人にはない何か特別な体験がものをいってくる。しかし、そのような感動中心の作文指導が年間70時間もできるとは思えない。

つまり、繰り返すことになるが、結果としての作文にのみ目が行っていったということである。だから、表現の巧拙や言語事項の誤りを指摘するなどして「作品」をつつき回すことも少なくなかった。表現の巧みな児童にとってはそれもよからうが、そうでない児童にとってはどんな時間となるであろうか。

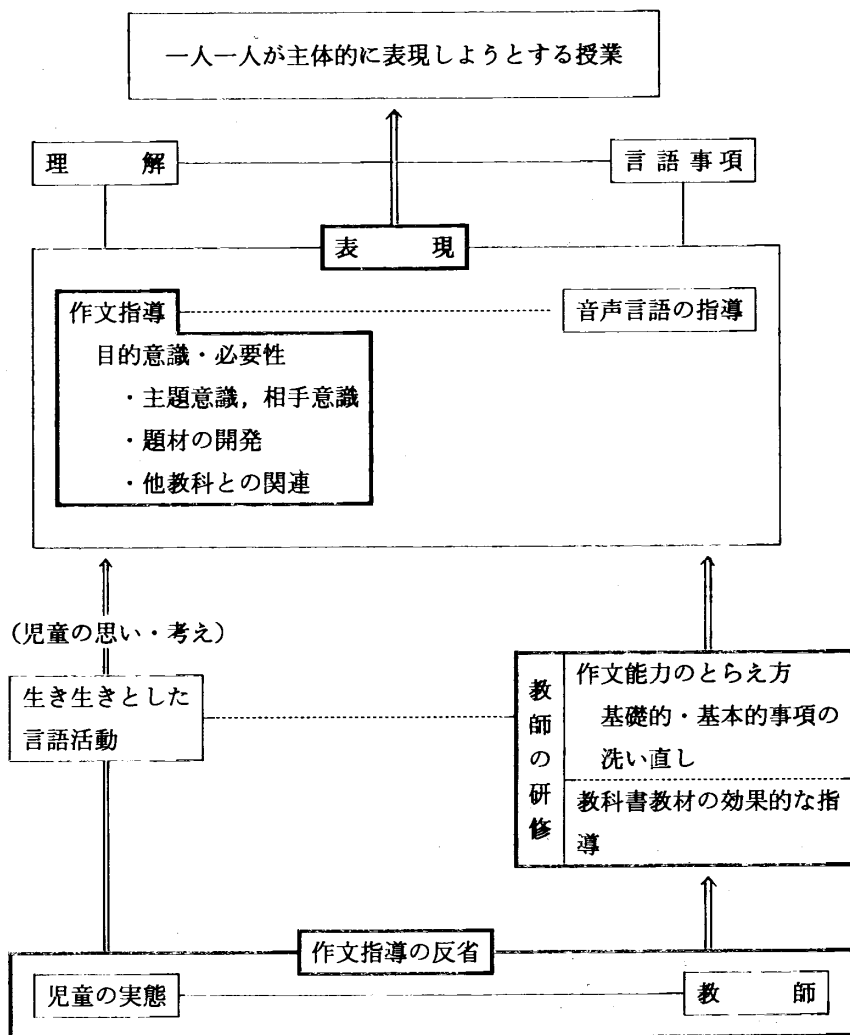
このようになってしまった原因の一つに、作品主義を打ち砕くまでのはっきりとした指導

観が生まれなかった、あるいは生まれていたのかもしれないが現場に定着しなかったということが言える。

作文の結果としての「作品」は、目に見えるものである。そして、それは、児童一人一人の目に見えない「思い」にささえられているはずである。目に見える部分への指導も必要ではあるが、表面に現れていない「思い」に気づかせ、それを掘り起こすことを怠っていたのでは「表現の指導」とは言えない。この点については、教科書教材でも大幅に改訂されている。指導者としても心していきたい。

## (2) 指導の構想

1, 2で考察してきたことを前提として作文指導の構想を次のように設定した。



### 3. 指導の方針

#### (1) 児童の実態 —児童は作文のどこに難しさを感じているか—

1学期に作文について児童のめあてを考えさせた結果は次のようであった。

- ・「思ったことをすらすら書けるように」などの主として取材に関すること…… 8名
- ・段落や文のつながりなどの構成に関すること…… 3名
- ・「思ったことがはっきり書けるように」という主題意識に関すること…… 9名
- ・「相手に伝わるような書き方」など、相手意識に関すること…… 4名
- ・記号や漢字などの言語事項に関すること…… 3名
- ・関心・態度に関すること…… 2名

(平成5年6月調査6年1クラス, 22名, 複数回答)

これらのうち、「思ったことをすらすら」というのは、取材のみではなく構成や主題にもかかわることである。また、相手意識と主題意識も深いつながりをもっている。この結果を見ると、取材と作文の主題、相手にどのように伝えるかという点に難しさを感じている児童が多いことがわかる。

表現する「思い」はあっても、どのような具体例でその「思い」を支え、相手に伝わるように書き表していくか、ここに難しさがある。同時に私たちの指導が意味を持つてくる場所がある。

#### (2) 指導の重点

6年生になると作文の指導目標は多岐にわたり、内容も高度になっている。取材・構想・叙述・推敲のそれぞれの項目について、しめくくりの指導が要求されている。言語事項についても、語句や文から段落や文章のレベルまで具体的に目標が設定されている。

しかし、それらを総花的に指導していったのでは、効果を上げることはできないであろう。関心・意欲の面から作文の技能までを含めた児童の実態を中心にして、指導内容を精選していくことが肝要だと考えられるのである。

また、作文というものを「生産」と「消費」の関係の中でとらえようとする考え方があるように、表現は理解に支えられて初めて表現する意味をもってくる。この点がこれまでおろそかであった。

前述した「作文指導の問題点」と児童の実態の両面から、指導の重点を次のように設定することとした。

- ア 主題意識を育てるための具体的な指導を工夫する。
- イ 教科書教材で効果的な指導をする。

### 4. 指導の実際

#### (1) 主題意識を育てるための指導

##### ア 日常指導の中で

日常的に行っている班日記や朝の1分間スピーチ等では、内容は自由であるが、必ず「題

名」をつけるようにさせた。もう一つは段落への関心を高めることである。どんなに短い文章であっても、「初め」と「終わり」があり、その間に「なか」があるということに目を向けさせたいと考えたためである。

## イ 教科指導の中で

### (ア) 短作文を中心とした指導

国語の時間に継続してきたことでは、短作文の指導がある。当初のねらいは、書き慣れるということと作文の題材への気づきを促すことの二つであった。短作文の方法とその意義を理解させながら実施し、折りにふれて「題名展覧会」をするなどして題材を見つける目を養うようにした。

作文指導では、どうしても評価の問題が大きくなっていく。ただ書かせればよいというものではない。また、教師にとって負担と感じられるようでは長くつづけることはできない。しかし、書くことは児童にとってエネルギーを要することである。教師もある程度の苦勞をしなければ子どもに力をつけることはできないだろう。

そこで、短作文を書かせた後、B4版1枚の文集にして印刷することとした。一人一人の作文ノートにコメントを書きながら、誰のを印刷するか考える。書かれたものをそのまま印刷するのではなく、教師がワープロで打ち直す。そうしないと1枚には収まらない。

こうすることによって、短い文章の場合には7～8名の作品を載せることができる。

この作業は大変な手間を要するようだが、実際はそれほどではない。次はどんな文章を書いてくるだろうと楽しみだった面もある。児童が書いたものをそのまま印刷する方法もあるけれども、教師がワープロで打つことには、計算外のメリットがあったのである。それは、児童の作文を一字一句たどることによって、用語や言い回しの癖、文章展開の特徴が把握しやすかったということである。これで、短作文に意図した一つのねらいが達成されたことになる。

一枚 一文集

集金の仕事 高橋 顕之

今日は、「一年生を迎える会」だ。これは、集金と企画で計画したものだ。集金が考えたゲームのジャンケン列で一年生は、「わあい、わあい。」と、喜んでくれた。ぼくは「よかった。」と思わず言ってしまった。一年生はとても満足そうな顔をしていて、最後まで笑顔だった。とてもゆかいな子どもたちだな、と思った。

ぼくは、六年生になって大変だなと思った。一年生を迎える会への協力や、夏祭り集金への協力など、とても大変なことだった。けれど、みんながぼくの作ったゲームを喜んで楽しそうにやってくれているので、ぼくはとても安心する。これからも、集金の目標の「みんなが楽しめるようなゲームを作る」をがんばって作っていききたい。

六年生になって思ったこと 茂木 祐子

六年になって初めての給食、一年生はまだ来ていないころ私は心の中で、「一年生はどんな子かなあ。」とか、「早くこないかなあ。」とか思っていました。

最初は、一年生もきつと緊張していると思います。初めは私も少し緊張してしまいました。二日目、一人の一年生に声をかけてみました。私

一六の二

「おいしい。」と言ったら、一年生は「うん。」と、言ってくれました。私はそのとき、一年生が言ってくれてとてもうれしかったです。

次の給食の時間、一年生のともちゃん、自分から私に声をかけてくれました。

「六年生、〜」

と、ともちゃんが言ったので、私は「うん。」と言いました。

ともちゃんは、お弁当を持ってきている一年生です。私は、水の中のスチューを出してあげました。とてもおいしそうで食べたくなりそうでした。ともちゃんの顔を見るとおいしそうな顔をしているので、私がわらったら、わらってくれました。うれしかったです。(鷹)

六年生の楽しい生活 山本 由美

六年生になって初めてやったことは、一年生と遊んだことでした。いつも、

「遊ぼう。」

と、声をかけてくれます。なので、私はいつも遊んでいます。一年生が

一枚文集を発行するねらいは、発表（伝達）の場を確保することと友だちの作文を数多く読むことによって優れた表現に触れ、作文の題材を広げることであった。

短作文では、次のステップとして児童の作文を題材に段落や構成の学習をおこなった。内容も初めは自由題が多かったが、徐々に条件をつけたりして工夫していった。行事作文でも、例えば「楽しい修学旅行」というように内容を限定したりすると、短作文が可能である。

作文カルテ

(1) 指導目標の重点化

短作文の指導と並行しておこなったことは、関心・態度の面と作文の技能の両面について目標を絞り込むということである。3で述べたように、6年生だからといって全ての項目について同じように指導していたのでは効果を上げることはできない。

短作文を継続する中で少しずつ明らかになったことを手がかりとしながら、内容を精選し、学期や年間を見通して指導していきたいと考えた。それが、右の作文カルテである。カルテといっても評価のためというよりは目標をはっきりさせるという意味合いが強い。

氏名	T. A					
作文の個人目標	・思っていることをすらすら書けるようになること。 ・文字(漢字)を上手に書けるようになる。					
段階	関心・態度	1種	2種	3種		
評	A	文章の構成方法に関心を持ち、いろいろな組み立て方を試みている。		○		
	B	自己以外の世界にも関心を持ち、表現する主題を求めようとしている。				
	C	友達の実現したことに関心を持ち、その良さを理解しようとしている。	◎	◎		
評	段階	作文の技能				
	A	「はじめ」「なか」「終わり」の簡単な構成ができる。		○		
	B	中心文と具体例を組み合わせて段落を構成できる。		○		
評	C	中心に書くことと文章の題との関係を認識できる。	○	◎		
	教科書教材	A	主題を明確にし、具体的に文として書ける。 主題や要旨を終本まで認識して書ける。 書き出しと結びを対応させることができる。		○	
		B	軽～重、全体や部分などの構成ができる。 一番書きたいことをはっきりさせられる。		○	
C		中心となることをどこにおくか、文章全体の中で考えられる。 たくさん書くところはどこか、はっきりさせられる。	○	◎		
備考	・段落のつくりや少しづつわけて書く。(1学期) ・文章の構成方法について考えよくなる。(2学期)					

(2) 教科書教材の効果的な指導

ア 理解教材との関連を重視して指導する工夫

読んだことが書くときに生かされるのが自然な形である。明確な文章を書かせるという観点から、説明的文章の学習のまとめとして実施した。

特に、「構成や段落」という概念は、小学校の高学年の児童にとってはかなり高度なものであると国立国語研究所の調査結果に現れているようである。説明文で何度となく段落の学習をしても、自分の作文にまで応用できる児童は数少ない。理解したことを実際にいかせるような指導を考えていきたい。

次の資料は、短作文で論理的作文力をつけることをねらった、本庄東小学校の秋山欣彦氏の実践例である。このほか、高学年の文章構成の指導に論理が平易な低学年の教科書教材を用いることなど、示唆に富む内容で教えられることが多かった。

私のクラスでも説明文の学習のあと、この作文を書かせたところ、適度な抵抗感があり効果的であった。ほとんどの児童が10分以内で書くことができたが、条件に合わせて書くということによって密度の濃い時間になった。



き出せるようにした。

次の「構成を工夫して」の学習では、これまでに作文ノート等に書きためた文章を振り返らせるなどして、構成の工夫という点にのみ絞って考えさせた。理解教材として掲げてある「長屋王木管の発見」の構成法を参考にして自分の作文にも応用してみようという教材の意図であるが、児童にとってはそう簡単にいくものではない。やはり、書くための参考になると教材文の程度が高い。そこで、右の補助資料「あげはの幼虫」を用意し、1学期に理解教材として扱った「太陽のめぐみ」と比べ読みをしながら構成の違いについて考えさせた。

しかし、この学習は思いのほか難しいと受け止めてしまった児童

がいた。右のような書き出し文の例を示してから話が飲み込めた児童もいたという具合である。書き出しと構成の工夫に的を絞ったはずであったが、こちらの予想以上に構成の学習は難しいということが納得された。

(イ) 生活の中に題材を求めて

「調査したことをまとめて」の学習は、研究発表会というあまり日常的ではない内容である。だからこそ、今まで以上に児童の身近な生活に目を向けて考えさせていかなければならない。最も難しいのは、「何について調べるか」テーマを決めることであろう。テーマ決定が児童主体のものにならないと、次の調べたりまとめたりする活動の中で主題を明確にしていく学習が中途半端なものになってしまう。

・指導計画(10時間の予定が、実際は13時間要した。カッコ内は実時間)

- ①単元のねらいをつかみ、研究発表会への関心をもつ。……………1時間
- ②教材文を読み、研究と発表のしかたをつかむ。……………2時間
- ③生活の中の関心の深い事柄について話し合い、  
問題をとらえて研究発表をする計画をたてる。……………2時間
- ④発表の原稿を書き、効果的な発表のしかたを練習する。……………3時間(6時間)
- ⑤発表会を開いて、相互評価する。……………2時間

あげはの幼虫

山田 あきお

- ① 七月十日の夕方、花だんのそばのへいで、緑色の虫を見つけた。からだに細かい糸を一本巻いてじっとしていました。
- ② 兄さんが「これは大発見だ。さわっちゃだめだぞ。たいへんだ、たいへんだ。」と言って家の中へかけこんでいきました。そして理科の教科書を持ってきました。
- ③ 二人で調べたら、あげはの幼虫でした。体の長さを測ったら四センチメートルありました。
- ④ 夜九時ごろ、へいのところに行ってみると、幼虫は体の皮をぬいでいました。頭のはうは半分ぐらいうす茶色に変わりましたがおしりのほうはまだ黄色でした。
- ⑤ 次の朝見たら、幼虫は、さなぎに変わっていました。体の色は、全部茶色でした。ピンセットではさんだら、まだやわらかくて、びくびく動きました。
- ⑥ 兄さんが、「あげはは、さしゅうやからたちなどの葉に、卵を生みつけるんだよ。そして、幼虫は、その葉っぱを食べて大きくなるんだよ。」と言いました。
- ⑦ 家のさんしゅうの木からへいまでは、七メートルもあります。四センチメートルの小さな幼虫が、七メートルも歩いてきたのかな。ぼくだったら家からどのへんまで歩いたことになるのかなあと思いました。
- ⑧ さなぎになってから、今日で三日目です。あと何日したらちようになるのか、毎日、気をつけて見ていようと誓います。

(小学国語二年教育出版)

書き出し文

松平 美和

陸上部の練習を始めるときだ。中村先生が、こう言った

「リレーの選手を発表する。…さん、…さん、松平さん。」

わたしの名前が聞こえたのだ。

萩原 真美

朝は天気よかった。すずしくもないし、あつくもない。今日は行けそうな天気。

高橋 顕之

さおに強いあたりが来た。ひきずられるような感じだった。それは大きないだった。







## (2) 今後の課題

児童の意欲や思考過程に沿った学習が展開できるように工夫することが何よりも大切である。そのために努力しなければならないことは次のような点である。

- ・ 教科書教材の扱い方を児童の実態に合ったものにする。サンプルとして扱うには難しいものがあるので、思い切って平易な文章を用意するなどして解決していきたい。
- ・ 意欲と能力の両面から児童の実態（変容）を把握するように努め、書くときの情意的なものを大切にしたい。
- ・ 短作文では、条件つき作文などで基礎的な技能が育つようにしたい。漠然と書かせているのでは効果が薄れる。
- ・ 作文カルテとして考えた関心・態度と技能の観点については、今後も試行錯誤しながら改善していきたい。
- ・ 児童の生活を軸として、短作文と教科書教材を関連させた作文の年間指導計画を作成すると、いっそう効果的な指導ができる。

また、論理的文章を書くという点については、教師自らが主題と構成について学ぶ必要を感じている。それは特に、「日本人の文章（話）はひとりよがりでわかりにくい。」という外国人からの批評を目にするときである。

私たちに、俳句の世界を味わうことに代表されるような、はっきりと表現しないで言葉や文章の余韻や余情を楽しむことに価値を置く傾向が強かった。しかし、論理的文章は言葉を尽くして書き手の考えを読み手に伝える文章であることを考えると、言葉に対する姿勢を大きく転換することが大切である。

主題を伝えるためにどのように段落を構成するか、また、段落の中の一文一文のつながりをどのように作っていくかなど、考えるべきことは多い。中でも、具体的事象とそれを統括する文をどのように関係づけて一つの段落を作り上げていくかということに論理的文章を練りあげる土台があると考えられる。

理解教材の学習のときは、中心文、トピックセンテンスなどとして気軽に扱ってきた。それを表現の学習のときにも意識させたいと思うが、書くとなると課題は大きい。まず自分自身が段落構成について学ばなければならないと強く感じる。主題を伝えるための明確な文章に数多く触れ、その表現を学びたいと思う。

### 《参考文献》

- |      |                                    |         |
|------|------------------------------------|---------|
| 秋山欣彦 | 論理的作文力をつける教材<br>(教育科学 国語教育 No.446) | 明治図書    |
| 加藤秀俊 | 自己表現                               | 中央公論社   |
| 倉澤栄吉 | 倉澤栄吉国語教育全集 1                       | 角川書店    |
| 鈴木孝夫 | 閉ざされた言語・日本語の世界                     | 新潮社     |
| 茂呂雄二 | なぜ人は書くのか                           | 東京大学出版会 |

## 評

国語科において、今回の学習指導要領では、とりわけ表現力の育成が重視されている。

表現力の育成を重視した理由として、次のようなことがあげられる。

- ・児童生徒の表現力が必ずしも十分ではなく、まとまった文章を書いたり、相手に適切に伝える話し方ができていないのではないかとと言われることが多い。
- ・表現力なかならずく作文力が国語の力の集約されたものと考えることができる。
- ・これからの情報化・国際化の社会では、表現力の向上が欠かせない。

このような点から考えて、本研究の目指している「生きて働く表現の指導—教師の課題は何か—」は今、国語科を指導する教師に求められている急務な課題である。

この研究の特色をまとめてみると

- 1 今回の学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえて、教師自身の今までの指導の在り方を振り返り、実践を通して指導方法の改善を図ろうと試みたものである。作文についての児童の問題点は教師自身の課題であるにとらえ、作文指導が敬遠されてきたこと、パターン化された指導方法、教科書教材への依存、出来上がった作品（結果としての作品）を重視した評価等をあげ、その改善に取り組まれた。
- 2 作文指導の重点を「主題意識を育てるための具体的な指導の工夫」と、「教科書教材で効果的な指導の工夫」に絞って実践研究をなされた。特に、教科指導の中では短作文を中心とした指導を試みられたことと、教科書教材では理解教材と関連を図った指導を工夫されたことなどはこれからの作文指導の方向性を示唆している。
- 3 研究推進方法は、授業実践を重視して、それをもとに児童の変容をきめ細かくとらえ、作文指導の目標を見定めながら、指導方法の工夫改善を図っている。

このような本研究は、新しい学力観に立った学習指導観の確立とともに児童生徒の側に立った授業の展開を構想していく上で大いに参考になる研究と思われる。今後ともこの研究を継続されて実践を積み重ねられ、そこから導きだされた課題の解決を図りながら、更に研究を深められることを期待して評としたい。